過ぎ至り漸く敵陣の後端迄攻略し、當面の敵を撃退するに與りて功あり、十月三十日部隊は夜襲を以て泰安鎮兵營を圍める諸部落の敵を掃蕩し、翌三十一日には敵前約三百米の第一線に在りて、敵の銃砲彈の集中火の下に掩體を構築しつゝ前進し、約五時間を費して午後五時過ぎに至り、漸く敵陣地前約百五十米なる敵陣の突出部なる獨立家屋に突入、之れを占領して友軍主力の攻撃據點を確保せり。翌十一月一日完全に泰安鎮を占領せり。この間に於ける鈴雄の奮闘特に目覺しきものあり、その功績偉大なりと認めらる。それより齊々哈爾、拜泉、大興安嶺等の各地に轉じて討伐及び警備に任じ、常に勇戰して赫々たる偉功を樹てしが、公務に基因して病魔の襲ふ所となり十二月二十六日、齊々哈爾陸軍病院に入院、八年二月二十五日內地還送のため哈爾賓を發し、三月三日宇品に上陸、廣島衞戍病院に入院、更に九日松本衞戍病院に轉院七月二十日現役豫備役、後備役を免除ぜられ、十一月十四日、日本赤十字社長野支部病院に轉院せり。爾後鋭意治療に努めしも其の甲斐なく九年三月十四日病勢俄かに革まり遂に鬼籍に入りたり。現役の志願の宿望を遂げながら、不幸中道にして病魔に斃る、眞に痛恨の極みと謂ふべし。然れども、鈴雄生前に於ける歴戰殊勳の數々は燦として千載不朽なり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。（澁川）

陸軍騎兵一等兵勳八等　古元肇

古元肇は岡山縣久米郡福渡町大字川口の出身にして父を隆治、母を加壽惠と云ひ、大正三年三月十六日に生る。昭和三年三月福渡高等小學校を卒業し、同五年三月福渡公民學校を、八年一月福渡青年訓練所を夫々修了せしが、この間操行優良にして表彰せられたること一再に止らず、資性溫順謙譲にして、而かも堅忍不拔の氣象に富み、事に當りて其の効を收めゝんば已まざるの氣概を有せり。小學校時代より體育運動に長じ庭球、野球は其の最も得意とせる所にして各所の競技會に出場、妙技を振ひしと謂ふ。

昭和八年一月二十日現役志願兵として、姫路騎兵第十聯隊に入隊し同月二十八日編成下令せらるゝや、第一中隊に編入せられ二月一日勇躍姫路屯營を出發せり。此の間編成下令と共に上官及び古參兵の指導の下に數晝夜に亘りて不眠不休編成改正業務に精勵し、又その輸送に當りては二、三年兵不足のため汽車汽船內の厩當番、不寐番等に服務して、完全にその任務を完うせり。かくて二月八日哈爾賓に到着後は晝夜兼行にて整理業務に精勵し、聯隊が熱河討伐に出動後は、依然哈爾賓にありて兵營の警備勤務に服せしが、二月二十五日午後一時五十分屯營東北の營庭に於て未調教馬を乘馬教練中受傷し、直ちに哈爾賓第十師團衞生班に入班せり。爾後鋭意治療に力めしも其の効なく三月四日遂に戰野の華と散りたり。眞に痛惜の極みと謂ふべし。然れども一死以て國に報ぜし盡忠報國の至誠に至りては千古不滅たり。肇公傷死の日を以て歩兵一等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。（澁川）

陸軍歩兵一等兵勳八等　青木登喜治

青木登喜治は、群馬縣利根郡片品村大字須賀川の人にして、父を政太郎、母をすいと云ひ、明治四十年十二月十一日生なり、大正七年三月片品尋常小學校を卒業し、爾後家業農に從事して勤勉なりしが、昭和四年一月現役兵として、高崎歩兵第十五聯隊留守隊に入營し、同年一月二十六日滿洲駐劄のため出發、旅順に到着し同地に駐劄せる第六中隊に編入せられて、同地の守備に任じたりしが、同年四月二十五日所屬部隊と共に內地に歸還し、五月二日高崎着屯營に歸還、同年九月三十日歩兵一等兵を命ぜられ、十一月中茨城縣下に於ける特別大演習に參加し、同年十二月精勤章を付與せられ、翌五年十一月善行證書を付與せられて滿期除隊となり、一應歸鄉したり。

昭和七年二月二十三日動員下令に依り、同月二十五日動員召集にて歩兵第十五聯隊第六中隊に應召し、三月七日大阪港を出帆、同月十三日吳淞に上陸、同十四日嘉定に到着、直に同地附近の警備に任じたりしが、當時便衣隊各所に出沒し、民心安定を缺けるに際し、連日の間不眠不休、危險を冒して巡察又は斥候に從ひ、或は徹宵要地の哨兵に服し、恪勤精勵にして克く其任務を完うし、此の間の功績顯著なるものと認められたり。

同年五月六日より師團は北滿地方へ轉進するに至り吳淞を出帆し、大連を經て、五月十一日哈爾賓に到着し、同地附近の警備に任じ、五月二十四日は朱家油房の戰鬪に參加し、敵陣地を奪取し之を追擊して呼蘭河南岸に進出し、同地停車場を占領す、其の行動極めて迅速機敏にして、功績を認められたり。次で五月二十七日二十八日兩日は泰家崗橋梁に於ける夜間戰鬪に參加して勇戰す。即ち同夜々半、中隊は泰家崗南方約二粁の呼蘭河鐵道橋に差かゝるや、前方近距離に於て、將に該橋梁を燒却せんとしつゝある敵を發見し、凸堤上に於て敵彈を冒しつゝ消火に努むると共に敵を擊退して、該橋梁を安全に確保することを得たり、此功績優秀と認められ、爾後六月中旬に亘り同橋梁の守備に任じたり。

同七年六月中海倫北方地區の討伐、七月中慶城附近並に劉家店附近の討伐に參加して偉功を立てたり。即ち七月二十七日第一線左小隊に屬し輕機關銃手として劉家店の敵を攻擊するに方り、側方より敵を猛射し、多大の損害を與へ、次で豐夜兼行、密林地區を越へ濕地難路を急進して、二十九日官家屯に露營中の馬軍を急襲包圍し、殆んど之を殲滅せしめたり。其の沈着にして勇敢なる動作は功績拔群と認められたり。然るに九月中病魔の侵す所となり、九月十六日海倫を發し、大連を經て同月二十六日宇品に歸航、同月二十八日高崎屯營に歸着し、十月四日召集解除となり、翌八年十二月十八日結核性腹膜炎（公病）にて病歿せり。

戰功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

登喜治、性質溫順にして堅忍、又義俠的精神に富めり。其の鄉里にあるの父母に孝養を盡し、弟妹を愛撫し、家業に精勵す。隣人皆之を敬愛し、其戰歿を傳へ之を悼まざるものなし。（佐藤）

陸軍砲兵一等兵勳八等　砂塚清次郎

砂塚清次郎は福島縣西白河郡白河町字飯澤の出身にして、明治四十四年五月五日に生れ、父は清八、母はヒヨと云ふ。大正十五年三月白河尋常高等小學校高等科を卒業し、昭和七年一月十日現役兵として野砲兵第二聯隊に入隊せり。

同年三月二十四日滿洲派遣の爲第五中隊に屬して仙臺出發、二十五日新潟港を出帆、三十日大連港に上陸、三十一日海城に到着し、四月下旬より六月下旬に亘り吉長吉敦線方面の警備に服せしが、吉林警備に際しては、廣大なる市街地に、警備部隊として歩兵若干と所屬第五中隊とのみの寡小部隊を以て之に當り、而かも聯隊本部を初め師團司令部も駐在しありしが、元衛隊團長馮古海麾下の匪賊數千は、吉林襲撃を謀り、其便衣隊等を潛入せしめ、高粱繁茂と共に益々横行し、北大營に放火、或は狙撃、或は列車の轉覆等頻々として突發し、人心全く不安なる狀態なりき。此時に方り、砲手たる清次郎は衛兵に、停車場警戒に野戰倉庫警戒等の諸勤務に勵み、又遊動砲兵となり毎夜領事館附近に待機し、降雨泥濘を冒して市内の警戒に努め、晝間は樞要地に對し示威運動、或は威嚇射撃を行ひ、又は便衣隊及不逞分子の一齊檢擧に活動し、以て僅少なる兵員にて克く吉林の治安維持を全うし、市民の皇軍信賴の度を愈々篤からしめたり。

五月七日突然拉法附近の匪賊討伐の命を受くるや、感冒馬多發の爲、夜半臂力を以て砲車を驛に運搬、列車に搭載し、八日午前四時拉法驛北方約一粁に到り、急造斜板に依り砲を卸下し、鐵道沿線に陣地占領し、夜半の雨は雪となり、强風さへ加はり、泥濘甚だしく、行動頗る困難なりしも、元氣旺盛に、克く難を排して同五時半射撃準備を完了し、同七時射撃を開始するや、益々沈着し照準其他の操作的確にして最初より命中彈を送り、敵を壓倒震駭せしめ、各門數發にして敵に多大の損害を與へ潰走せしめ、容易に拉法を占領し得たり。

吉林歸還に際しては、車軸を沒する泥濘及び風雪等多大の困苦を突破し、而かも迅速に故障なく其任を果し、本戰鬪に於ける功績偉大なるものあり。次いで七月二日より殘留隊要員として、海城駐屯地警備に任じ、衛兵、或は巡察、或は斥候等の繁劇なる諸勤務に奮勵し、時恰も炎熱燒くが如く、傳染病各地に流行し、兵匪亦跳梁するに方り、堅忍不拔克く兵營を守備し、駐屯地の治安確保に多大の貢献を致せり。然るに此間公務に基因し、右濕性胸膜炎に冒され、八月十日遼陽衛戍病院に入院、十八日廣島衛戍病院に轉じ、二十五日仙臺衛戍病院に入院、十月二十日除隊歸郷、此間手當を盡したれ共其甲斐なく、終に八年四月二十四日午前七時半公病死を遂げたり。

是より前七年十月十八日砲兵一等兵に進められ、後勳八等瑞寶章を授け賜はれり。（加藤）

陸軍輜重兵一等兵勳八等　薦田岩次郎

薦田岩次郎は愛媛縣宇摩郡上分町の出身にして、明治四十一年十月三十日、義朗の長男に生れ、母をサイと云ふ。大正

十二年三月上分尋常高等小學校高等科卒業後大阪に出で、某農具商店に勤務一ヶ年半更に滋賀縣石山東洋レーヨン株式會社工場に轉じたり。性質溫厚篤實、勤勉力行の譽高かりき。昭和四年廣島輜重兵第十一大隊に入營滿期除隊後、再び前記レーヨン會社に勤務中、七年一月下旬、上海事變勃發し、動員下令せらるゝや、二月二十五日充員召集のため輜重兵第十一大隊に應召し、同二十九日勇躍沱間港を出發し、三月五日江蘇省七了口に上陸、直ちに同地碇泊場司令部勤務に服し、連日連夜、軍需品の揚陸、整頓及び搭載に從事し、積極的に努力貢獻せり。特に三月七日夜の如きは、風雨の爲め、繫留中の小發動艇の沈沒せんとせしを、小隊長の命により他の二十名と共に徹夜排水作業に從事し、該艇沈沒を免れしめ得たり。同八日七了口碇泊場司令部勤務を完全に終了し、徒步行軍にて瀏河鎭に到り、同地碇泊場司令部勤務に服務し、翌九日午前、其の任務を完了し、午後四時積日の疲勞をも顧みず、自ら進ん、同地南倉營區西部衞兵勤務に服し、其の第五步哨を命ぜられ、氷雨に加ふるに寒風中を凜然として立哨す。十日朝稍發熱せるも敢へて人に語らず、遂に其の重責を完うし、同勤務交代後發熱甚しきため、初めて不時診斷を受け、流行性感冒性肺炎と決定し、隔離靜養後同月十二日、第十一師團第四野戰病院に入院、鋭意治療に力めしも、其の甲斐なく、昭和七年三月十六日、遂に戰野の華と散りたり。眞に、痛惜の極みと謂ふべし。所屬中隊長は、之れを稱揚して

曰はく、「鷲田二等兵ノ公病死ハ、戰鬪員ガ敵彈ノ下ニ挺身躍進シ、終ニ任務ノタメ名譽ノ戰死ヲ遂ゲタルト同等ノ殊勳ヨシテ、責任觀念ノ旺盛ナル、衆ノ模範トスルニ足ルモノト認ム。」と。岩次郎、又以て瞑すべきなり。公病死の日を以て、一等兵に進めらる。功により勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。（澁川）

陸軍步兵一等兵勳八等　齋藤亨

齋藤亨は、福島縣伊達郡大枝村大字西大枝の人なり。昭和八年六月二日獨立守備步兵第五大隊第四中隊に入營し、同日より滿洲事變に關する業務に從事し、同年七月六日一等兵を命ぜらる。

昭和八年六月二日より同年七月六日に至る間、鐵嶺に在りて滿鐵線沿線地區に於ける警備に當り、克く繁劇なる警戒勤務其の他の業務に服して精勵したり。斯くて同年七月四日以降は中隊主力と共に奉山線の守備或は新民縣の警備に從事し、此の間戰鬪兵として斥候巡察等に服し、又は警備列車の乘組員として、危險を冒しつゝ、激務に服し、終始熱心に其任務を遂行し、中隊の任務達成に寄與せる所甚大なりしが、七月六日警乘勤務中白旗堡驛西方約九粁の地點に於て、列車追突のため顚覆したる際受傷、頭蓋骨々折兼胸部挫傷により、奉天衞戍病院に入院、同日死亡、功績優秀を以て後日左の恩賞あり。

戰功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

亨性質溫順にして篤實、責任觀念旺盛なり。早く父を亡ひ、母まつの養育を受く、亨家鄕に在るの日は母に仕へて孝養怠らず、家業に精勵せり。然して入營後は特に軍務に勉勵にして諸般の成績優良なりしが、遂に其の職務に殉じたるは洵

に同情に値するものなり。然れ共苟も戰場に準ずべき地に於て其任務の服行中に受傷、遂に死歿したるは、以て戰死に比するに足り、其の芳名は永く後世に傳はるを得べし、亨たるもの亦天命に安んじ、地下に瞑目して可なり。筆者は特に亨の瞑福を禱ると共に其の遺族の將來に多幸ならんことを希ひつゝ茲に擱筆す。（佐藤）

陸軍歩兵一等兵勳八等　藤原健市

藤原健市は、岡山縣川上郡平川村の出身にして、父を京平と云ひ、明治四十三年六月五日に生る。平川小學校を卒業し、昭和六年一月十日徴兵として、岡山歩兵第十聯隊に入營せり。同年十二月七日編成下令せらるゝや、同九日、第五中隊に編入せられ、二十二日勇躍、宇品を出發し、大連に上陸、同二十八日奉天に到着せり。それより七年一月三十一日に及びては、打虎山附近鐵道警備に任じ、多數匪賊の出沒する間にありて連日連夜至嚴の警戒勤務に服し、克くその其の任務を遂行し、又小隊が打通線に出動するや、數日間に亘り勇敢に行動し、殊に裝甲列車救援に方りては、終夜不眠不休、四周の敵匪を警戒し、屢々敵團を擊退して完全に任務を遂行し、救援作業を容易ならしめて偉勳を奏せり。爾後、七月八日に亘りては、奉天、哈爾賓、三姓、湯原、通河、德莫立、阿城等の各地に轉じて討伐及び警備に任じ、常に赫々たる偉功を樹て、同七月八日より同十七日に亘りては、木蘭、鳳山鎭方面の討伐、並に警備に任じ、木蘭守備及び拉々屯方面討伐間、船團監視として船中に殘り、至嚴なる警戒に任じ、以て船團をして安全ならしめ、上陸部隊をして後顧の憂たからしめたり。更に鳳山鎭方面の討伐に赴くや、或は炎熱と戰ひ豪雨を冒し、泥濘膝を沒する惡路に屈せず、連日猛行軍を行ひ遂に鳳山鎭を占領せり。此の行動に依り馬占山軍の側面を脅威し、之れが潰滅を速ならしめたる功績は眞に偉大なりと謂ふべきなり。次いで七月十八日より同三十日まで中村支隊に加はり、連江口を占領し、北進して焦旅と鶴立鎭、峻德屯附近に戰ふや、敵銃砲彈の下、勇猛果敢に攻擊して、遂に之れを潰走せしめ、更に長驅、炭坑並に北方地區に追擊して其の戰果を大ならしめたり。爾後中隊が、旅團豫備として三姓警備に服するや、健市また之に加はりて精勵し、克くその重任を完うせしめたり。次いで八月三日よりは哈爾賓の警備に任じて九月五日に及びしが、時恰も未曾有の大水禍に遭遇し、剩へ惡疫の流行を極め、避難民は各所に殺到して勵もすれば、治安の潰亂を來たさんとする折柄、歩哨或は巡察として服務し、連日連夜至嚴の警戒に服し、治安の確保に任じたり。而して九月六日より同十五日に亘る長春北方地區討伐並に警備間は、密門站又は烏海站の警備、騎兵の支援、砲兵掩護、大興咀子の戰鬪に參加し、殊に大興咀子の戰鬪に際しては、彈丸雨飛の間、勇猛果敢に活躍し、分隊、小隊の任務達成を容易ならしめて赫々たる偉勳を收めたり。然るに不幸、中道にして病魔の襲ふ所となり、鋭意治療に力めしも其の甲斐なく、漿液膜結核兼肺結核にて八年一月十八日、遂に逝けり。眞に痛惜の極みと謂ふべし。然れども、歴戰殊勳の功績、燦として千載に輝き、英名萬古に香るべし。健市又以て瞑すべきなり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。（澁川）

陸軍歩兵一等兵勳八等　山岸安太郎

山岸安太郎は新潟縣刈羽郡中里村大字新町の出身なり、明治四十四年四月一日農山岸藤太の長男として生れ、母をチイと云ふ。大正七年四月中里尋常高等小學校尋常科に入學し、十五年三月八ケ年皆勤章を授與されて同校高等科を卒業、爾

後家業に從事し、性質温和從順にして、人に交はりて和あり。昭和七年一月十日徴兵として高田歩兵第三十聯隊に入營せり。當時聯隊は滿洲事變に參加して滿洲にあり、安太郎は初めその駐屯地たる旅順に於て軍務に從事し、四月二十日事變參加のため所屬機關銃隊と共に出動し、同二十一日より南滿洲鐵道沿線の警備に任じて同二十九日に及びしが、此の間主として遼陽附近に位置し、歩哨又は巡察として熱心精勵し、又進んで繁劇なる雜役諸勤務に從事して克くその任務を完うせり。四月三十日より吉長、吉敦線方面の警備のため遼陽を出發せしが、その吉林に至る鐵道輸送間は困難なる馬匹搭載卸下に任じたるのみならず、輸送途中進んで馬積貨車内にありて馬匹の監視愛護に努め、以て長途の輸送を完全ならしめたり。かくて吉林到着後は直ちに同地附近の警備に從事し、日夜精勵して部隊の任務達成に貢献しありしが、時恰も吉林に於ては腦脊髄膜炎の流行中なりき。安太郎はこの危險を冒して連日の降雨中を衞兵、巡察、厩當番等の勤務に精勵せるものなり。而も五月七日流行性腦脊髄膜炎に罹り、吉林商埠地東洋病院に入院し、鋭意治療に力めしも其の甲斐なく、七年五月十三日遂に戰野の華と散りたり。眞に痛惜の極みと謂ふべし。然れども生前に於ける靈忠報國の至誠に至りては赫々として千載不朽なり。公病死の日を以て一等兵に進められる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。（澁川）

陸軍歩兵一等兵勳八等　山手清勇

山手清勇は秋田縣仙北郡豐岡村の出身にして、明治四十五年五月一日に生れ、父は勇之助、母ははぎと云ふ。大正十五年三月豐岡村尋常高等小學校高等科第一學年を修業し、其性質温厚にして忠實、克く父母に仕へ、業務に勤勉にして讀書を趣味とせり。

昭和七年十二月二日現役兵として公主嶺獨立守備歩第一大隊第二中隊に入隊、同日より滿洲事變の勤務に服し、翌八年三月中旬迄公主嶺附近の警備に任じ冱寒に堪え繁劇なる諸勤務に勵みて功を奏し、次いで伊通縣西部山岳地帶を利用して横行暴虐を極むる匪賊の掃蕩を任務とする久保掃匪隊編成せらるゝや、迫擊砲手として第一小隊迫擊砲分隊に屬し、三月十三日より十六日迄奉天、吉林省境五棗子、丁家溝、石家嶺、景家臺附近山岳地帶の掃蕩に出動し、連日險難惡路を踏破し、克く迫擊砲車輛を推進して迅速なる部隊に追隨し、其行動を容易ならしめ、匪賊に依り荒廢に歸したる僻地に於て、困苦缺乏に耐へて奮戰し、宿營に際しては、四圍に機を覗ひつゝある匪賊に對し、至嚴なる警戒に任じて乘ずべき隙を與へず、爲に該地域の匪賊は悉く潰走し、住民は皇軍の威德に霑へり。十六日掃匪を終り范家屯に歸來するや、同地分遣隊より劉房子南方に數十の匪賊出現の報を得たるを以て、掃蕩隊は之を討伐するに決し、列車を利用して轉進準備をなす。清勇は連日の疲勞を顧みず、勇躍して率先迫擊砲分隊の轉進準備に任じ、午後零時十分晝食後、裝具を裝着せんとする際雜嚢を床上に落し、内部に收容せる手榴彈炸裂して負傷し、遂に同一時二十五分公傷死を遂げたり。

勇戰奮鬪克く迫擊砲の威力を發揚し、友軍の戰鬪を有利ならしめたる功績は赫々たり。

即日歩兵一等兵に進められ、後功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。

遺族は青森縣西津輕郡岩崎村字久田に現住す。（加藤）

陸軍輜重兵一等兵勳八等　田尾益信

田尾益信は德島縣美馬郡端山村大字東端山の出身にして、明治四十二年一月十三日に生れ、父は福之助、母はタメノと云ふ。大正十三年三月端山尋常高等小學校高等科を卒へ、翌十四年六月德島地方專賣局貞光出張所に於て、煙草耕作短期講習を修了せしが、日頃學問を好み、昭和四年十二月文部省主催成人講座に於て公民科並に實業科を修了し、五年二月大日本國民中學會正則科第二學年を修業し、尙同年三月尼崎市立商工實修學校專修科英語初等科の課程を修め、其成績何れも優秀なりき。兼ねて陸軍々人を志望し、滿十七、八歲の二回に亘り徵兵檢査を受けしが、共に身長僅に二分の不足にて不合格となり、適齡時に受檢するや、輜重兵特務兵に合格、雀躍して四年十二月善通寺輜重兵第十一大隊に入隊、翌五年一月滿期除隊後、巡査志願の爲奮勵す。

越えて七年二月二十三日動員下令あり、二十六日充員召集に依り善通寺工兵第十一大隊に應召、第一中隊に編入せられ、上海派遣の爲二十九日詫間港を出帆、三月四日吳淞港に上陸し、五、六日所屬工兵小隊の吳淞及獅子林の兩砲臺爆破に際しては、幾多の危險と勞苦とを顧みず、器材の運搬整備に努力して、作業の成功に寄與せる事多大なり。

同月七日八日小隊が吳淞より瀏河鎭に在る中隊に復歸するに方り、中隊器材の大部を運搬するや、通路不良而かも運搬具等無きに不拘、良く困苦缺乏に堪え、小隊の復歸を容易ならしめ其功多大なり。然るに此間公務に基因し急性氣管支炎に冒され、九日第四野戰病院に入院、次いで二十六日宇品港に上陸、廣島衞戍病院に轉じ、其間醫療を盡したれ共其甲斐なく、遂に四月十七日公病死を遂ぐるに至れり。

此日輜重兵一等兵に進めらる。功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。（加藤）

陸軍步兵一等兵勳八等　內田友一

內田友一は神奈川縣足柄下郡小田原町の出身、明治四十四年八月春藏の長男に生れ、母はよねと云ふ。大正十五年三月小田原第一小學校高等科卒業後家業に勵み、傍ら四月より實業補習學校に入り勉學中、昭和二年五月創立せし小田原商業學校に轉じ、五年三月同校を卒業し家に在りて商業に專念す。七年六月一日徵兵として大石橋獨立守備步兵第三大隊第二中隊に入隊、同日より滿洲事變の勤務に從事し、南滿線守備の爲大石橋守備隊豫備隊として精勵、以て第一線部隊をして後顧の慮なからしめたり。然るに公務に基因する腸チブスにて九日大石橋分院に入院するに至り、十三日旅順衞戍病院に轉院し、醫療を盡したれ共遂に十九日午後十一時頃公病死を遂げたり。卽日步兵一等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

友一は共性溫和なれ共剛膽克く孝養を致し、九人の弟妹に慈しみ至らざるなく、殊に共敎育に意を注ぎ、又諸方面の人に廣く交際し、あらゆる階級に一、二の親交者を有せり。友一の公病死するや、六月二十三日所屬隊に於て壯嚴なる納骨

式擧行せられ、七月十五日兩陛下より祭粢料御下賜の恩命に浴し、同十七日大連市主催にて盛大なる慰靈祭執行せられ、同二十三日小田原町に於て頗る森嚴盛大なる町葬擧行せられたり。誠に餘榮あり英靈以て瞑すべし。

所屬中隊長重大尉の弔詞に曰く「爾靈山下に消えし君の肉體は、粉砂となりて滿蒙進出の我が勇士と共に、國防の壘を固むべく、幡龍山に漂ふ君の英靈は、必ずや永へに生命線守備の戰友を守護し、以て自ら秀で、以て稔らんことを」と。また至言なりといふべし。

友一、資性溫順にして而も剛毅なりき。弟妹九人の教育に意を注ぎ、細心克くこれを指導せしかば、弟妹の友一を尊敬すること父母に對すると異らず、又友人間の交際圓滿にして、各方面に親友を有し、戰死の後友人の弔問多きに父母も驚きたりといふ。（加藤）

陸軍歩兵一等等勳八等　林房義

林房義は島根縣松江市殿町の出身にして、父を萬太郎、母をエイと云ひ、明治四十三年一月二十四日に生る。大正十三年三月殿町尋常高等小學校高等科を卒業し、同年四月松江市松陽新報社に給仕として入社、十五年一月同社速記者となり、勤務に精勵せしため、同社々長より感謝狀を授與せられたり。昭和六年一月十日徴兵として松江歩兵第六十三聯隊に入營し、同十二月一日一等兵に進級せり。同月十八日滿洲派遣編成下令せらるゝや、選ばれて出動隊に編入せられ、同二十二日勇躍松江屯營を出發し、大連に上陸七年一月二日奉天に到着せり。直ちに、干樹拍子附近の警備に任じ、一月三日より同五日に亘りては打虎山南方八臺子馬圈子附近匪賊及び友軍墜落飛行機捜索に任じ、日本軍未踏の地に於て、克く皇軍の威武を宣揚し、討伐の目的を達したり。更に同八日には白家窩棚附近匪賊討伐に從ひ奮戰遂に匪賊をして潰走せしめ、尙ほ長驅して匪賊の根據地たりし中安堡を衝きしが、此の時早くも其の主力既に逃走後なりしかば、該地方に皇軍の威武を充分發揚して功あり。爾後哈爾賓島吉密河一面坡通河德莫立依蘭等の各地に轉じて討伐及び警備に任じ、常に赫々たる偉功を奏し、五月十七日には中隊と共に依蘭掃蕩に參加し、終日勇敢機敏に活動し、多數の武器彈藥を押收して師團主力の入城を安全ならしめて偉勳を奏せり。師團の依蘭に入城するや、中隊と共に沿岸の招撫平定の任務を以て富錦に派遣せられ航行中の警備勤務沿岸都市に於ける掃蕩巡察飛行場設置等の諸勤務に服して其の任務を完うし、五月二十七、二十八の兩日は、大平川の戰鬪に參加し、中央小隊火線分隊彈藥手として膝を沒する泥濘地に於て、克く彈藥の運送に努むると共に、敵情の監視警戒並に連絡に任じて分隊の戰鬪

を有利ならしめたり。斯くて同三十日より同七月二十八日に亘りては依蘭の警備に任じ常に、第一線にありて下士哨並に巡察に服し、至嚴の警戒を擔任して、完全に其の任務を達成し、七月二十八日大隊が馬占山並に附近平定の任務を以て鶴山鎭附近に出動するや、第一小隊に屬して鑛山停車場に位置し、西方及び南方の警備を擔任し、繁劇なる警備に服せり。此の間焦旅の改編に當りては、之れが掩護の監視に服し、終始一貫熱心忠實に精勵公務に基因し病魔の襲ふ所となり八月三十日入院爾後鋭意治療に力めしも其効なく八年五月三十日遂に逝けり。眞に痛惜の極みと謂ふべし。然れども其の生前に於ける幾多殊勳の功績は、赫として千載不朽なり。房義又以て瞑すべきなり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。（澁川）

陸軍歩兵一等兵勳八等　石原要三

石原要三は島根縣仁多郡鵜嵩村大字高田の出身なり。明治四十三年十二月二十三日に生れ、父は故百三郎、母はタケと云ふ。大正十二年三月郷里の尋常小學校を卒へ、十五年三月縣立横田農學校を卒業せしが頭腦明晰にして成績優良なりき。昭和四年五月一日より鐵道員として奉職し、七年一月十日現役兵として歩兵第六十三聯隊に入營せり。

同年四月五日滿洲派遣の編成下令あるや、第一中隊に屬して十一日松江を出發、十二日宇野港を出帆、十六日大連港に上陸、十九日哈市に到着し、二十三日迄同地を警備し警戒其他の諸勤務に勵みて治安維持に貢献し、次いで二十七日迄一面坡附近の警備に服し、第一線警備隊として各種警戒勤務に當り、聯隊主力掩護の任を全うせり。二十八日より五月二日に亘り哈市師團司令部其他重要なる數個所の警戒に任ずるや、連日情況極めて不穩の時機に際會し、各種の警戒勤務に不眠不休に克く其任務を果せり。次で松花江沿岸兵匪大討伐の爲、五月二日より五日に亘り哈市より通河迄の船舶輸送に方りては、富錦號に乘組み匪賊横行する沿岸を至嚴に警戒し、以て其航行に遺憾なからしめ、五日より通河の警備に服し、第一線に在りて各種の警戒勤務に奮勵し、八日同地上陸戰闘に於ては、退却せんとする敵を攻撃せる後速に第一線に進出し、更に堅固なる陣地を迅速に構築して警戒に任ずる等、多大の功を奏せり。十二日德莫立の戰闘より十四日依蘭に向ふ中村支隊の追敵間は、小數の兵員を以て船團の警戒の任を全うし、支隊をして支障なく依蘭に入城せしめ、十四日より十六日に亘りては車馬通過の爲、德莫立より依蘭に至る道路を修築し、又牡丹江の河川偵察に從事し、更に旅團司令部の直接警備隊等各種の勤務に精勵し、引續き同十七日より八月十六日迄依蘭の警備に服せしが、この間所屬中隊は第一線として南門附近正面約千五百米の間を擔當せるため堅固なる陣地の構築に從事し、連日連夜至嚴なる警戒を以て遂に敵に乘ずべき隙を與へざりき。又中隊主力出動後未曾有の大洪水に際會し、一致協力以て武器被服材料等を安全なる位置に搬送し、且一般避難民を救恤し、克く皇軍の威武並に博愛の精神を發揮し、其功績多大なり。

斯くて八月十六日より二十三日迄佳木斯の警備に當り、中隊は同地の西方及西南方に對する警備を擔任せしが、下士哨

巡察斥候衛兵等に精勤し、次いで三十日に亘り鶴立鎭の平定に加はり、連日連夜至嚴なる警戒勤務に或は礦山との連絡に從事する等、幾多の功を顯はせり。然るに此間公務に基因し、右濕性胸膜炎に冒されて、八月三十日第十師團衛生班に入班、爾後各地の衛戍病院に入院、十一月二十日歸郷、此間醫療に努めたれ共共効なく、遂に八年三月末日公病死を遂ぐるに至れり。

是より前七年七月十二日に一等兵に進めらる。功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。（加藤）

陸軍騎兵一等兵勳八等　井上清一

井上清一は岡山縣御津郡津賀村大字加茂市場の人にして、父を近藤森治、母を同ふさとし、明治四十五年七月一日生る。故ありて養父井上武平、養母かのに養はれ、大正十五年三月福山尋常高等小學校を卒業し、次で福山實業補習學校に入學、昭和四年四月同校を卒業し、爾後三箇年間福山青年訓練所の業を修め、昭和七年四月津賀公民學校研究科に入所し、同年十二月之を修了せり。昭和八年一月現役兵として、姫路騎兵第十聯隊に入營し、同月二十八日第十師團編成改正下令に依り二月一日姫路を出發し、滿洲派遣の征途に上りたり。

是より曩き編成改正の命下るや、上官及古參兵指導の下に數晝夜に亘り不眠不休の狀態を以て、編成改正の業務に精勵し、其功勞を認めれたり。二月一日姫路を發し、豐二日宇品港に於て乘船、同日同港出帆、同月四日釜山に上陸し、同月七日安東縣を通過して同月八日哈爾賓に到着す。姫路哈爾賓間に於ける長途の輸送に當りては、汽車及び船舶内に於て、既當番、不寢番等に服するの外、多數の馬匹荷物等の積載卸下に從事し率先難事に當り、決して勞苦を事とせず。二月九日以後哈爾賓に位置して軍事の訓練を受けつつ、同地警備の任に服し、殊に同年二月十八日より聯隊主力は熱河作戰のため出動するに方り殘留の寡少なる兵員と共に哈市内外の警備を續行して、日夜兼行、至嚴の警戒を施行し、恪勤精勵にして、其任務を達しつつありしが、偶々三月三日午前十時過ぎ哈爾賓市馬家溝競馬場に於て、臨時購買馬に騎乘し之を調教中、落馬して頭部を强打し、人事不省に陷り、直に聯隊醫務室に收容加療せしも、翌四日午前九時三十分遂に死歿せり。

同日騎兵一等兵に進められ、後左の恩賞あり。

戰功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

清一性質溫厚にして服從心に富み、孝心深く殊に養父母に仕へて孝養怠らず父母も亦之を慈愛すること深厚にして家庭與滿隣人の羨望する所たり。清一又心を公益に傾け、兒童の通學に便せんがため獨り早晨より道路の積雪を除く等の善行多く、青年團及び消防組員として其の發展に盡力する所多く、又敬神崇祖の念强く、農事に關しては特に熱心且つ趣味を以て增産多收につき研究を積みつつ、一面自家々運の隆昌を圖り、鄉黨之を賞讃し、模範的青年として之を推奬せりと云ふ。（佐藤）

忠勇顯彰會總裁及役員

總裁　大勳位　梨本宮守正王殿下

會頭　正三位勳一等功三級　町田經宇

副會頭　正三位勳一等法學博士　清水澄

常任幹事　正四位勳二等功五級　中村濱作

同　從四位勳三等　山岡國利

幹事（イロハ順）

正六位勳三等　稻畑勝太郎

從四位勳三等　林市藏

正五位勳二等　德富猪一郎

正三位勳一等功三級　大島健一

從七位　小倉正恒

小畠元三郎

正三位勳一等功三級 有馬良橋

正三位勳一等功三級 男爵 奈良武次

從四位勳三等 永田秀次郎

正三位勳一等功三級 鈴木貫太郎

評議員（イロハ順）

正四位勳二等功五級 石坂弘毅

從三位勳一等功四級 林彌三吉

神田正雄

從五位勳六等 田澤義鋪

正四位勳二等功五級 中島虎吉

正三位勳一等功四級 子爵 小笠原長生

正四位勳二等功四級 大湊直太郎

從三位勳二等功四級 大野豐四

從四位勳六等 福島繁三

安岡正篤

正四位勳二等功五級 四王天延孝

主査委員（イロハ順）

從四位勳二等 向田金一

正五位勳三等 內田保雄

本會名譽顧問

（イロハ順）

正二位勳一等 男爵 一木喜德郎

正三位勳一等功四級 林銑十郎

正二位勳一等 公爵 德川家達

從二位勳一等功三級 岡田啓介

正三位勳一等功五級 大角岑生

正二位勳一等 伯爵 金子堅太郎

從三位勳一等功五級 川島義之

正二位勳一等 田中光顯

正二位勳一等 男爵 倉富勇三郎

從二位勳一等 男爵 山本達雄

正三位勳二等 公爵 近衛文麿

正三位勳二等 後藤文夫

正二位勳一等 伯爵 清浦奎吾

正三位勳一等 湯淺倉平

從二位勳一等 男爵 平沼騏一郎

昭和十一年三月十二日印刷
昭和十一年三月十五日發行

發行所　社團法人　忠勇顯彰會
東京市澁谷區穩田一丁目一四四番地

發行兼編輯人　入江寅次
東京市澁谷區穩田一丁目一四四

印刷者　百目木智璉
東京市神田區三崎町三丁目二六

印刷所　株式會社　共榮舍
東京市神田區三崎町三丁目二六

343
1

終